

女子美術大学大学院 博士前期課程
インタラクティブ空間演習 2016後期

藝術文化研究の「超」基礎
～ 西欧近代主義の確認 と 研究的視点の設定

(2016-09-21)

担当： 石井 拓洋
ishii05042@venus.joshibi.jp

2016

藝術文化研究のための「視点」の設定

- ・ 藝術文化研究での 基本的視座

「20世紀の知の最大の変革は、
物事を『実体』ではなく、『関係』として認識しようとすることです」

(小林康夫、船曳建夫編 『知の技法』 1994年、102頁。)

実体論 から 関係論 へ

藝術文化研究のための「視点」の設定

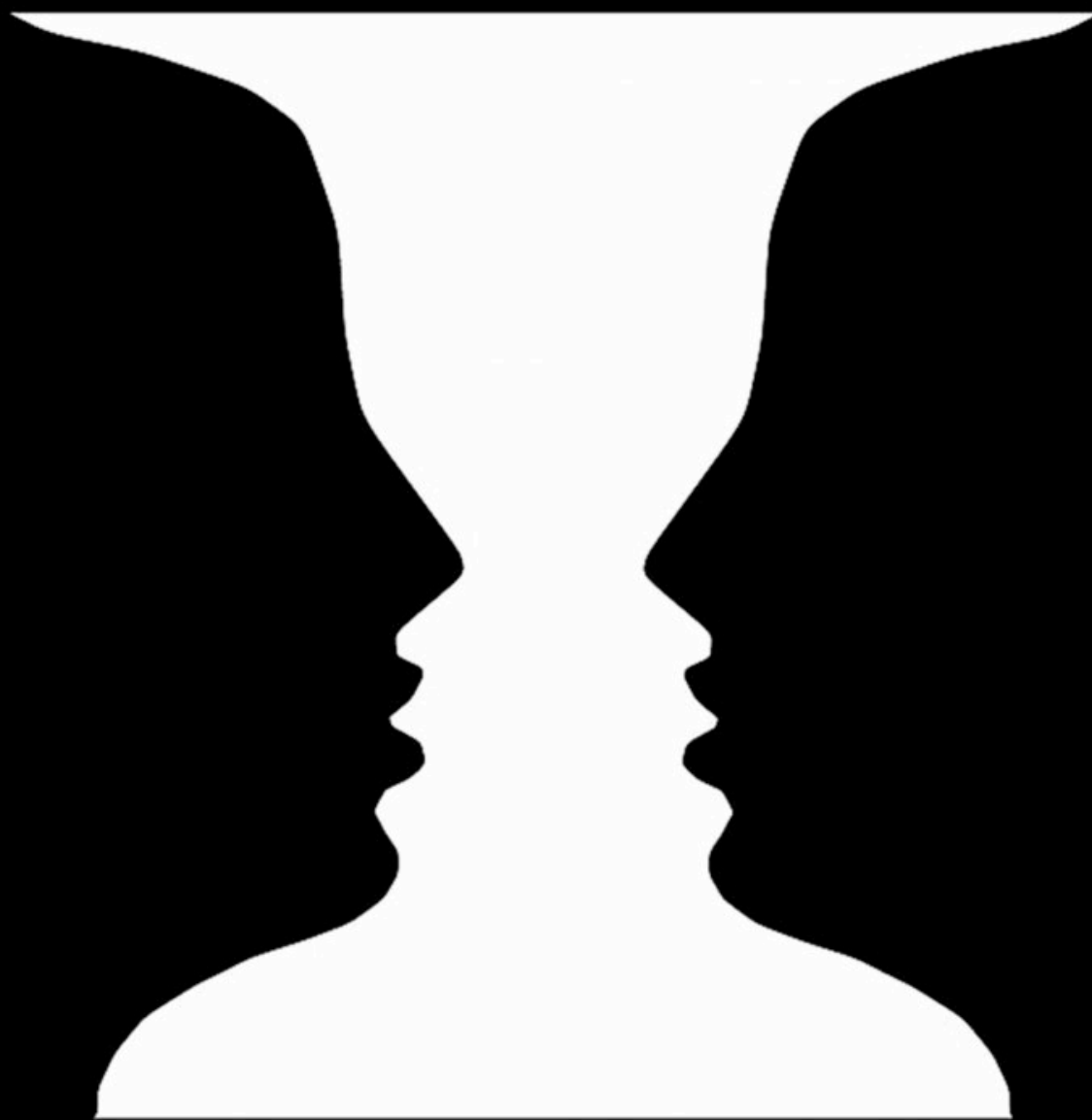
- ・ 藝術文化研究での 基本的視座

「20世紀の知の最大の変革は、
物事を『実体』ではなく、『関係』として認識しようとすることです」

(小林康夫、船曳建夫編『知の技法』1994年、102頁。)

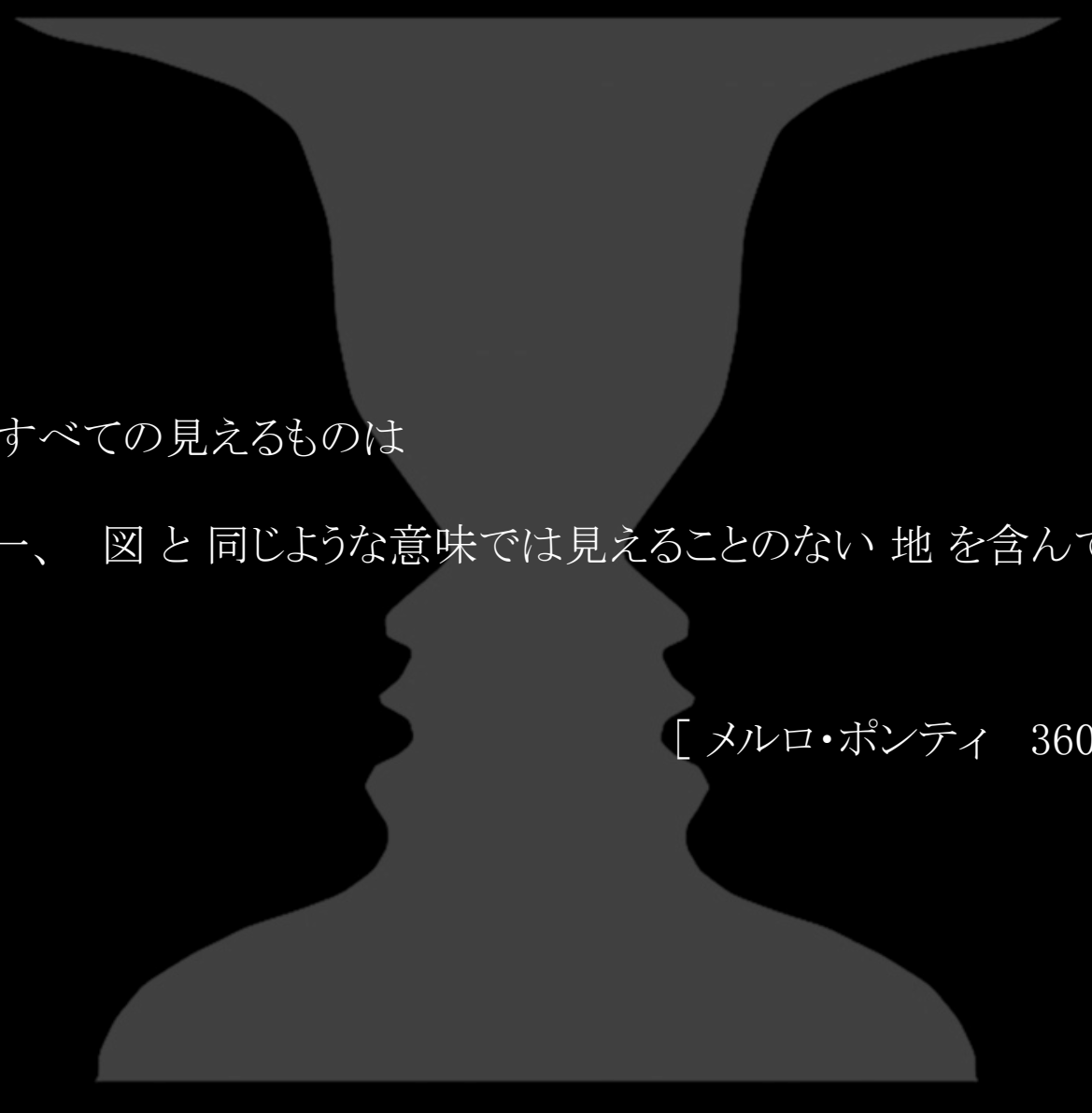
「○○とは何か?」、「○○の本質とは何か?」 というよりも (実体論, 本質主義、など)

「日本では、なぜ○○は、○○と認識されるのか?」 (関係論、構築主義、など)



「ルビンの壺」(多義図形)

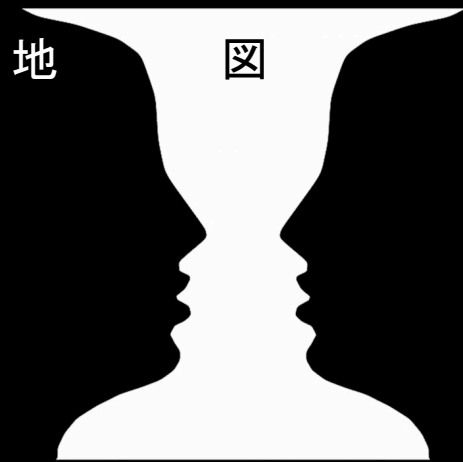
<http://d.ibtimes.co.uk/en/full/1426245/rubins-vase.jpg?w=736>

The image shows the classic Rubin's Vase, a black and white optical illusion. It is a symmetrical shape that can be perceived as either a white vase with a black outline or two black faces in profile facing each other. The central text is overlaid on this image.

「すべての見えるものは

一、 図 と 同じような意味では見えることのない 地 を含んでおり、」

[メルロ・ポンティ 360頁]



- ・ ものごとは、一方に「図」があれば、かならずもう一方に「地」がある。
- ・ 「図」と「地」が共存することによって、はじめて全体が成立する。相互依存的である。
- ・ 「図」または「地」のうち、一旦いづれかに着目すると、もう一方が見え難くなりがちだ。
- ・ 「図」と「地」には優劣はない。存在としての水準は同程度である。

Ex.) 強者と弱者、 中心と周縁、 役にたつものと役にたたないもの、 新しいものと古いもの、 順境と逆境、 男と女、 陽と陰、、、

藝術文化研究のための「視点」の設定

- 藝術文化研究（文系的研究）方法 を学ぶ むずかしさ

初学者が 入手しやすい「研究方法入門」、「研究の仕方」の ような著作は、

しかし、つまるところ 理系的研究の方法に関する内容がほとんどである。

一方、藝術文化研究 には、特有の、いわば 文系的「研究的視点」が必要となる。

したがって、ちまたの「研究方法入門」を読んでも、

おそらくは、研究の肝心な部分に到って 用をなさないことが多い。

藝術文化研究のための「視点」の設定

● 藝術文化研究の過程

1. 研究上の〈問い〉の明確化
2. 〈問い〉にもとづく調査によるデータ収集
3. 〈研究的視点〉によって データを分析する
4. 研究上の〈問い〉の再考 （1へもどる）

藝術文化研究のための「視点」の設定

● 今日にもとめられる「研究的視点」の性格

- 西欧近代主義を相対視する視点（西洋中心、主体性、還元、進歩）
- 知の権力性に批判的な視点（「国家のイデオロギー装置」アルチュセール）
- 正史（canon）を疑う視点（歴史叙述と権力）
- 周縁への視点（中心と周縁）

※ 西欧近代主義 = 「知」、「知の権力」、「中心」、「正史」

時代区分としての「近代」とは？

きんだい 【近代】

2. (modern age) 歴史の時代区分の一。広義には近世と同義で、一般には 封建制社会 のあとをうけた 資本主義社会 についていう (広辞苑 p.733)。

中世
↓
近世

11C頃「封建社会」
17C頃「絶対王政」を経過

(主従関係)



↓
近代

18C末「フランス革命」
「市民社会」の成立 (封建社会の打破)

(自由と平等)

• 啓蒙思想 Enlightenment

- 17Cから18Cの西欧における旧弊打破の革新的な思想
 - 合理的**理性**を尊重し、**進歩主義**を標榜をした
 - 理性的思惟によって**宗教的権威**や**王侯貴族に抵抗**した
 - 政治、教育を通して人間生活の**幸福の増進**を理念とした
 - **基本的人権** (自然権 = 人が生まれながらに有する権利) の萌芽
 - その成果は『**百科全書**』 (**ディドロ**ら編, 1751-80) に編纂
-
- 「キリスト教・王侯貴族」のためから、**「市民」のための生活**へ
 - 啓蒙思想が「近代」を導いた

ルネ・デカルト (1589 – 1650) Rene Descartes

それまでの 中世のスコラ学、神学を批判して、合理的探究 (科学) の基盤をつくった



画像 : <http://www.ghic.usp.br/server/Sites-HF/Fabio-Ardito/>

- 「私は考える、それ故に私は有る」 (哲学的思考の出発点)
- 〈主体〉 (理性的な私) の誕生
- 精神と物質 の 「物心二元論」 へ (精神と身体、人間と自然、あらゆる二項対立が派生)

啓蒙思想の特徴 : 西欧「近代主義」の特徴

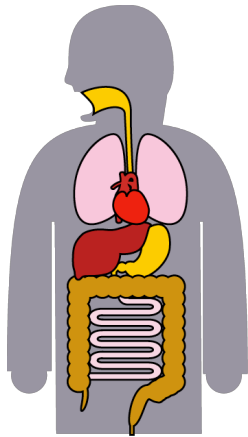
- **西欧中心主義** eurocentrism
西洋こそが世界で最も進んだ文明であるという考え
- **要素還元主義** reductionism
物事の本質をさぐるには、本質以外の余計な要素を極力排除すべしとする考え
- **進歩主義** progressivism
新しいことは常に良いとする考え
- **人間中心主義** anthropocentrism
人間を 自然環境・生物 など 万物の中心とする考え
- **機械論** mechanism
人間は科学によって自然を制御することができるとする

「要素還元主義」：近代主義的世界観の要素としての

「要素還元主義」 reductionism

「私の研究しようとする問題のおのをおのを、できうるかぎり多くの、
そして、それらのものをよりよく解決するために
求められるかぎり細かな、小部分に分割すること」

(デカルト「第二部」『方法序説』落合太郎訳、岩波文庫[青613-1]、1953年初版、p.29)



画像: http://bsoza.com/ill_medical/body02_a05.htm

Q. 人間の体の仕組みを知りたい

- 各臓器ごとに分割して取り出して考える
- 各臓器が持つそれぞれの機能を把握する
- 分割した各臓器を再び組み合わせる。元通りになる。

「科学」

しかし、把握可能か？本当に元通りになるのか？
本来、全体の中でこそ機能していたのでは？

参照「2対6対2の法則」「アリの法則」（2割が生産的、6割は普通、2割が非生産的。しかし、、、）

「機械論」：近代主義的世界観の要素としての

「機械論」 科学は自然の営みの制御・予測が可能か？

機械論 mechanism

自然界の諸現象を、霊魂や内的目的などの目的論的な概念を一切用いずに、作用因のみによって作動する機械とのアナロジーに基づいて解釈しようとする決定論的な、かつ還元主義的な思想。

(横山雅彦「機械論」『岩波・哲学思想事典』岩波書店、p.303)

※ 異常気象・大地震・大噴火、あるいは核エネルギー、、、
自然のスケールは、しかし、人間よりも遥かに大きいのではないか？

「進歩主義」：近代主義的世界観の要素としての

「進歩主義」 科学の発展、進歩は、人間の幸福につながるのか？歴史は存在するのか？

「 進歩的思想という、もっとも広い意味での啓蒙 が追求してきた
目標は、人間から恐怖を除き、人間を支配者の地位につけるということ
であった。しかるに (※ = にもかかわらず)、あます所なく啓蒙された地
表は、今、勝ち誇った凶徴 (※ = 凶を示すもの) に輝いている。

(ホルクハイマー&アドルノ (1947=1990) 『啓蒙の弁証法』 岩波書店、p.3)

※ 二度の大戦争、ナチスの蛮行、核兵器による大虐殺。
また、現代のインターネット環境など、科学の発展は、しかし、
われわれに常に楽観的に明るい未来を約束するものなのか？

藝術文化研究のための「視点」の設定

- ・ 藝術文化研究の過程

1. 研究上の〈問い〉の明確化
2. 〈問い〉にもとづく調査によるデータ収集
3. 〈研究的視点〉によって データを分析する
4. 研究上の〈問い〉の再考 （1へもどる）

藝術文化研究のための「視点」の設定

- ・ 今日にもとめられる「研究的視点」

- 西欧近代主義を相対視する視点（西洋中心、主体性、還元、進歩）
- 知の権力性に批判的な視点（アルチュセール「国家のイデオロギー装置」）
- 正史（canon）を疑う視点（歴史と権力）
- 周縁への視点（中心と周縁）

※ 西欧近代主義 = 「知」、「知の権力」、「中心」、「正史」

藝術文化研究のための「視点」の設定

● 藝術文化研究のための、代表的な「研究的視点」の一例

- ・ マルクス主義文化批評
- ・ カルチュラル・スタディーズ
- ・ 構築主義 social constructivism
- ・ 構造主義、ポスト構造主義
- ・ 記号論

※ 藝術文化研究において、「研究的視点」の 学び が深まれば、必ずその学説の主唱者たる本人にまでいたるはず
それを、学びの深化のひとつの基準とする （ex. バルト、フーコー、アルチュセール、他）

藝術文化研究のための「視点」の設定

● 「調査」と「研究的視点」の学び（＝諸概念の理解）の同時進行

- ・ 「データ蒐集」の努力は、いうまでもなく重要。しかし、、、
- ・ しかし、「研究的視点」を学ぶことが、もっとも重要
- ・ 「データ蒐集」と「研究的視点」を同時進行する困難さに対処する
- ・ 「研究的視点」の学びの過程では、大量の難解なる「概念」に直面する
- ・ 文系的「研究的視点」の学びはむずかしい（大学でこそ学ぶべきこと）
- ・ 「研究的視点」の学びの深まりこそが、研究の質を左右する
- ・ 文系的「研究的視点」の理解は、研究のみならず、仕事、人生で有用